

エステル・デュフロ著「貧困と闘う知—教育、医療、金融、ガバナンス—」みすず書房 2017年2月17日刊を読む

I. 通わせるか、学ばせるか—学校を改革する—

1. (1) 今日、私たちは、親、教員、あるいは子どもたちにモチベーションを与えるのは何かを、よりよく理解できるようになっている。
(2) 親たちは教育の重要性を理解しており、子どもを学校に入学させるつもりで見える。
(3) 教育費の軽減によって、教育を普及させ、最も貧しい人々に資源を再配分することが可能になった。
(4) この熱意を維持するためには、親たちが失望したり落胆したりしないように、教育の質を改善することが不可欠であり、急務である。
2. (1) 教員の側はモチベーションが低い。かれらは欠勤が非常に多く、学校にいても授業をしているとは限らない。
(2) こうしたモチベーションの欠如は、短期的には、かれらが費やした労力を報酬に反映させることで補正することができる(常勤のかわりに有期契約にしたり、欠勤を処罰したりする)。
(3) しかし、より長期的には、教員たちが今よりも大きな責任を引き受けることが必要である。
(4) 現状のような生徒とカリキュラムのもとで、教員たちは人間として達成できない任務を達成するように命じられている。
(5) 読み書きができない子どもたちに上級の知識を教えることは不可能である。
(6) ところが、「プラタム」のような団体は、ボランティアや薄給のスタッフにシンプルな目標とそれを達成するための手段を与えて、仕事をしてもらうことに成功している。
(7) 子どもたちは現実に読み書きを学ぶことができる。そして読み書きができるようになるとき、それは教員にとっても子どもたちにとっても、本物の成功である。
3. (1) 教育に関する議論では、子どもたち自身がどう判断するかという論点はたいてい欠落している。
(2) それにしても、**子どもの側も欠席率が非常に高い**。
(3) ウツタル・プラデーシュ州やラージャスターン州の子どもたちは平日の三日のうち一日、ケニアの子どもたちは平日の四日のうち一日は欠席している。
(4) これらの欠席は、一つには病気が理由であるが、
(5) もう一つには(理由としては弱い)子どもたちが家の仕事を手伝っていることが関係している。

(6)しかし多くの場合、子どもたちが学校に行かないのは、単純に授業が退屈だからである。

4. (1)教育の質を向上させる第一のステップは、学校を改革して、教員も生徒も学校に通うことに喜びを感じられるようにすることだと思われる。
- (2)現実に合わせたカリキュラムを開発するだけでなく、遊びやスポーツ活動を導入することも役に立つだろう。
- (3)言うまでもなく、それは(カリキュラムの簡素化について言及するときに教員や教育者が恐れているように)貧乏人向けの「安売りの」学校をつくりだすことではない。
- (4)それは、紙の上ではすべてを約束するが実際には何の役にも立たない学校の代わりに、生徒たちの多様性を認め、基礎知識の習得にアクセントを置くような学校をつくりだすことである。

P.55 ~ 56

II. 第 I 部の序

1. (1)教育と健康は、それ自体に価値があると同時に経済成長の要因でもある。
 - (2)このことについては、他のテーマでは例がないほど、しっかりしたコンセンサスが得られている。
 - (3)経済学者の中で**教育と健康の一義的な重要性**をとりわけ強調しているのが、アマルティア・センである。
 - (4)センにとって、「**健康と教育は、人間の生の発展における本質的な能力**」、彼の表現によれば「**ケイパビリティ**」である。
 - (5)それなしには、自由やウェルビーイング[よき生]といった観念は意味をなさない。
 - (6)国連開発計画(UNDP)は、センの影響力のもとで 1990 年に「人間開発指数」を発表したが、これは国の発展を計測する手段として、やがては国内総生産(GDP)に代わるものと見なされるようになる。
 - (7)この指数は①平均余命、②就学年数、③一人あたり所得の平均値である。
 - (8)したがって**健康と教育が、指数の 3 分の 2 を占めている**ことになる。
2. (1)最も保守的な経済学者たち、すなわちノーベル経済学賞を受賞したシカゴ学派の 3 人をはじめとする人々でさえ、**教育と健康の重要性**を認めている。
 - (2)セオドア・シュルツは(物的資本とのアナロジーで)「**人的資本**」の概念を生み出したが、これは**個人の才能と適性の総体を指し示すものであり、教育と健康を本質的な構成要素としていた**。
 - (3)ゲーリー・ベッカーはこの概念を一般に普及させ、さらにロバート・ルーカスは、**人的資本は持続的な成長のエンジン**だと考えた。
3. (1)こうした信念は、アカデミックな世界に限られるものではない。
 - (2)1995 年から 2005 年まで世界銀行の総裁をつとめたジェイムズ・ウォルフエンソンにとって、**女子教育**はいわば奇跡の解決策であり、それはあらゆる側面において開発に奉仕す

る。

(3)女子教育は、乳幼児と妊産婦の死亡率を下げ、彼女たちが将来産む子どもたちの教育水準を、男の子についても女の子についても高め、生産性の向上と環境マネジメントの改善を達成することを可能にする。それらをあわせると、より急速な経済成長、そしてとりわけ成長の果実のよりよい分配がもたらされるのだ。

P.10 ~ 11

4. (1)アマルティア・センは、ケイパビリティを次のように定義している。

(2)人間が達成できる機能(状態と行為)の多様な組み合わせ。したがってケイパビリティは、個人が何らかの生活を送ることができることを示すような機能のベクトルの集合である。

<コメント>

『『文字』が読めていた子どもたちは『単語』が読めるようになり、『単語』や『文章』を読むことができた子どもたちは『読解』ができるようになった。』(同著P.41)

「文字」→「単語」→「文章」→「読解」→「読解力」と道は長いようではあるが、着実に行えば、人間の「ケイパビリティ」は確実に現実化する。

2020年4月15日(水)